

本はともだち

リレー読書日記

加藤陽子

かとう・ようこ ●東京大学大学院博士課程修了(国史学)。現在、東京大学大学院人文社会系研究科助教授。著書に『模索する1930年代』『戦争の日本近現代史』など

作家と寄り添いながら伴走し 偉業に加わった二人の編集者

松本清張は、近代史愛好家や研究者にとって、特別な作家だ。学生時代に『昭和史発掘』シリーズ(文春文庫)を読んだ時の衝撃は今でもよく憶えている。もとは64年から71年にかけて『週刊文春』に連載されたものだが、連載後半で延々と書き継がれた「二・二六事件」は、とくに圧倒的な迫力をもっていた。

作家の並々ならぬ力量もあつたろうが、連載を契機に発掘され、初めて世に出された資料の迫力が尋常ではなかった。決起将校の訊問調査など、まずは、事件を起こした側の記録が作家のもとに集められた。さらに、鎮圧にあつた側の記録である戒厳参謀長の日記、はては軍法会議で裁く側にまわった判士たちの手記やメモも集められた。



料がほしい」とのたまう作家の、すべてのお膳立て、先行取材をした人物だったのだ。早稲田の史学科で日本近現代史を専攻した藤井は、多忙という字の前に超をいくら付けても追いつかない作家に代わり「自分の関心のあるテーマで現代史のラインナップを作ってみよう」と思いたち、大胆にも作家の手を引いて走り始めた。すごいことだ。陸軍機密費問題、佐分利貞男公使の怪死、スパイ「M」の謀略、などなど。今でもすぐに思い出せる『昭和史発掘』の名ラインナップは、彼女の脳

松本清張が特別だったのは、蒐集した第一級資料を『二・二六事件』研究資料』全3巻(文藝春秋)として出してしまったことだろう。私もこの資料集にお世話になったが、ある日、編者の名前が松本清張・藤井康栄と、連名なのに気づいた。藤井さんとは誰だろう。解説を読み、とにかくこの方が実際に資料の蒐集にあつたのだということだけはわかった。

しかし、知らないとは恐ろしいことなのだとしみじみわかつたのは、藤井康栄『松本清張の残像』(文春新書、735円)を読んでからのことである。『週刊文春』編集部で清張を担当することになったこの藤井こそ、「現代史をやる」「他人の使った材料では書きたくない」「一級資



髓からまずは生み出されたもののなだった。しかし、忘れてならないのは、作家とこの先行取材者との間に、敬愛と信頼の念が一貫して流れていたことだろう。晩年、照れ屋の作家は彼女に「ありがとう。いやなことは一度もなかったね」と述べたという。よい言葉だ。藤井は現在、北九州市立松本清張記念館館長を務めている。ちなみに、作家はサインした著書をくれる際、藤井の旧姓の方で「大木康栄様」と書くのが常だった。

憧れと尊敬の念を

さて2冊目は、宮田稔栄『追憶の作家たち』(文春新書、756円)。こちらは中央公論社(当時)の文芸誌『海』元編集長が描く作家たちの姿だ。松本清張、西條八十、埴谷雄高、島尾敏雄、石川淳、大岡昇平、日野啓三。7人の精神の傍らで過ごした緊迫した日々が、隅々まで神経の行き届いた筆致で追想され、読む者の心を動かす。59年に中央公論社に入社したばかりの編集者の卵は、松本清張担当にされて、とまどう。当時、実際に起こったスチュワードレス殺人事件を題材に、清張は長編推理『黒い福音』の執筆にとりかかっていたが、ここで、超多忙の作家に代わって困難な取材にあつたのが、早稲田の仏文を卒業したばかりの著者だった。時に冒険もかえりみず、真摯に取材する著者の姿は、作家の評価するところとなり、連載が本になれば「謹呈 この本の共同取材者 大木康栄様」とのサインを頂戴するまでになる。

むむ。今のところ、プレイバック。大木康栄様。先ほど出てきたのは大木康栄様。穂と康の1字違い。そうです。このお二人は、康栄さんが姉、穂栄さんが妹の、2歳違いの姉妹なのであります。私として、この読書日記を書き始めるまで気づかなかつた。読み返してみれば、たしかに、康栄さ



んの本の方にちらりと「中央公論社にいる妹が松本清張担当の編集者で」と書かれたくだけりがある。

もつとも、プロの編集者として独自の活動をしてきたお二人を、こう括るのは失礼な話だろう。しかし、零からものを創造する人々への憧れと尊敬の気持ちを終始持ち続け、その気持ちを原動力に、自らも偉業を成し遂げてしまったという点で、この二人は特別な編集者だといえる。

著者の描く「文壇」の姿は、とてもやさしい。たとえば、最晩年の埴谷雄高を、鬱期に入った北杜夫と著者が見舞う場面。『死霊』の作者に向かつて「おじいちゃんどうしたの」などと呼びかける、無神経な家政婦は、北杜夫のフ

用意してきた著書にサインし、それを家政婦に贈る。

埴谷をそこらのおじいさん扱いするような人にサイン本などあげる必要などないではないかと、にがにがしく見ている著者に、北はいう。「でもね、まりちゃん。そうしたら埴谷さんが親切にしていただけだと思うって」。北杜夫はほんとうに素敵だ。

「戦争体験」を核に

島尾敏雄については、78年に撮影された、沖繩の海を見つめる写真が秀逸である。「そろそろ、海に還ろうか」とでも言いたげな137ページの島尾の姿は、一見の価値がある。

最後に、著者の目の確かさ

を。大岡昇平のヒロイン像について述べたくだけりである。

『武蔵野夫人』の道子、『花影』の葉子、いずれにも、ヒロインを見つめる作者の、明晰な認識する目を感じるといえる。

なぜ大岡はヒロインを冷徹に見つめるのか。著者は、作家の自伝的作品『少年』の中の言葉「私の小説に出て来る女性は、必ず複数の男と性的交渉を持たねばならず、しかも決して男を愛してはならない。性的経験から無疵で出て来なければならぬのである」に、その答えを見出す。芸妓あがりだった母、47歳で亡くなった母への、作家の屈折した愛情を、この文章から著者は読み取ったのだ。

3冊目は、鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺

戦争が遺したもの



0円)。副題に「鶴見俊輔に戦後世代が聞く」とあるように、上野と小熊の名コンビが、これまで語られることの少なかった、鶴見の戦争体験の真相に迫っている。

後藤新平を祖父として生まれ、戦後、丸山眞男と『思想の科学』を創刊した思想家にとつて、戦争とはいかなるものだったのか。自殺未遂と女性問題で旧制中学を放校になった為、38年に渡米する、この不良少年時代の凄みのある顔写真は一見の価値がある。

日米開戦後、交換船で日本

うとのことで、海軍軍属を志願し、語学能力を買われ、ジャワのジャカルタの海軍武官府で勤務する。敵側の短波放送から「正しい」戦況を掴むのが若き思想家の仕事だった。

隣の部屋の軍属が、拿捕した中立国船員の殺害を命ぜられるのを実見したり、自らも士官用慰安所用地の接収をやらされたりする。命令で人を殺さねばならないのは時間の問題となる。いっぽう、傍受から敵の最前線がジャワに近づきつつあることもわかる。

このときの閉塞感と、命令で人を殺してしまうかも知れないとの恐怖感が、戦後、鶴見に「自分は人を殺した。人を殺すのは悪い」とだけ、一息で言えるような人間になろうと決意させる。戦争体験こそが戦後を生み出したのだ。